

# シリーズ 評論

北の隣人 第四部

## 日ソ交流をどう考える

70

新体制「あらしの一年」

ゴルバチョフ体制のソ連がスタートしてから、もう一年が過ぎた。この間、ソ連の変化はきわめて大きかった。政治的にはブレジネフ時代以来のリーダーシップの硬化化とジェロントクラシー（老人支配体制）を二禁にくつがえし、

経済的には、科学技術革命と生産の効率化を求めて大胆な改革に着手しはじめた。ゴルバチョフ書記長は、みづから「現実主義」という言葉を頻用して内外情勢に対応しようとしており、また、過去のソ連共産党第二十七回大

会を「スターリン批判」を敢行した二十回大会の三十周年を最近著しく関係を改善した。中国の指導者自身、従来のよ

# まず二島返還の道を

東京外国語大学教授 中嶋 嶺 雄

のソ連が抱えている社会的・経済的病弊は、あまりにも深刻であって、一朝一夕に癒やすことなど不可能である。それだけに、対外的にはソフトムードで出ざるを得なくなってきたともいえよう。

「領土は時間との戦い」

だとすれば、北方領土問題を包含む日ソ関係改善のチャンスは増大しつつある、と一般

ことではないだろう。

そもそも日本外交は、七〇年代末期までの歴史的な中ソ対立を外交的に利用すること

を怠り、おそらくもう二度と訪れることのない、あの深刻な中ソ対立という千載一遇のチャンスを見送ってしまった。それどころか、一九七八

譲歩（本来、日本の立場からすれば、ソ連の譲歩

どころではないのだが）をとりつけて妥協し、残りの二島については、あくまでも領有権は主張しつつ、共同利用が

共同開発、もしくは二島買取りへの道を探ることがもつとも現実的であろう。さもない限り、永遠に二島返還を主張しつづけて時間の経過を待

るだろう。だとすれば、日ソ外交はいよいよ長時間のたたかひにもなってくるのだ。

日本の重み知らせよ わが国は残念ながら第二次大戦で負けたのだという冷徹な事実を直視し、しかも二十

一世紀には、さらに大きく成長し、繁栄する平和国家・経済大国だという自信をもつべきである。その



昭和四十年東大大学院国際関係論課程修了、社会学博士。五十二年東京外国語大学教授。この間、在香港外務省特別研究員、オーストラリア国立大・パリ政治学院客員教授などを歴任。現代中国学を専攻、主な著書に「中ソ対立と現代」「北京烈々」など多数。長野県松本市出身、四十九歳。

月に合わせて開催するなど、ソ連の新しい転換への並々ならぬ意欲を感じさせずにはおかない。しかも、従来のソ連は、対外的にはなにをやるに

も、宿敵・中国の存在に拘束され、中国に足を引っぱられてきたのだが、その中国とは

うなソ連脅威論からいって完全に見られるかもしれない。全に脱しているだけに、ソ連の行動余力はこの点でも大きくなっているの見なければならぬ。

もとより、このようなゴルバチョフ路線の展開にもかかわらず、社会主義大国として

には見られるかもしれない。だが、これまでの日本外交がいわば米中双方の反ソ戦略に乗じて、ソ連の対日依存度を高めるような政策をとっては

このような経緯を顧みれば、半世紀以上もたった領土問題を外交交渉で決着させることは、まず二島返還というならまずまずまずかし

あすは作家

野坂 昭如氏

な